

小学人体問答書出版の時代考証*

谷 津 三 雄** 藤 井 敏 博**
江 川 為 明** 谷 津 徳 男**

緒 言

鎖国をとき知識をひろく世界にもとめた明治政府は、特におくれていた教育の普及を不可欠なものとし、明治¹⁾4 (1871) 年7月18日文部省を設置、旧大学の官制を廃止し、全国における教育と医事衛生の事務を総括管理して、教育と医学振興の基礎を作った。

翌5 (1872) 年2月11日、文部省に医務課をおき、医事衛生事務を分掌、更に同年8月3日文部省は「学制」を布告し、旧来の寺小屋式教育からの脱皮を目ざした。この「学制」はその制度、組織及びカリキュラムにおいてすべて欧米教育の長所をもとにして作り、学区、学校、教育、生徒試業、海外留学生規則、学資など109章からなり特に未種痘児の入学を禁止、学科中に「養生」をとり入れた²⁾。

即ち、これままでの学校は職業や身分によって制限されており、武士には武士らしい学問、商人には商人らしい学問、また、農民には農民の身分にふさわしく、農業にさしつかえないような学問に限られ、決して身分不相応な学問は許されなかったが「学制」では職業や身分にかかわらず、国民全部が教育をうけられるようになった。そのために全国を8大学区にわけ、区ごとに1つの大学をおき、1大学区を32中学区にわけ、区ごとに1つの中学校をおき、1中学区を210小学区にわけ、区ごとに1つの小学校をおくこととした。従って制度の上では8つの大学と256の中学校と

53,760の小学校ができることとなり、教員と教科書とをまずそろえなければならなくなったので、急遽東京湯島に師範学校を作り、米国人スコット Scott を大学南校から転傭して教員の養成をした。しかし急に教育を必要としたことから従来の私塾の教師に補修教育をも行った。また、教科書は主に問答式になっている Wilson's First Readerの直訳を使用した。これが小学読本の巻之一で明治6年に文部省より発行された。このリーダーの第4巻に人体解剖生理の部分があり、それを小学人体問答、初学人体問答、小学人体部分問答、人体問答図解、人体分部名称誌、小学人体論、小学人体窮理問答、小学必要人体問答、人身問答、幼学人体問答、小学人体問答定度などと訳され、明治8年から同11年頃までに多くの出版をみた。

従って、これらの人体問答書の内容から、わが国の黎明期における義務教育上の最初の医学知識の教育程度を知ることができる。特にこの「学制」においては「小学校へ教育ノ初級ニシテ…」とあり、小学校の教育は国民全部に対して一様に課すべきことを明確にし、また、能力に応じて誰れでも上級の学校に進む機会をもっていることを示している。この医学知識から更に医科大学に進んだ学徒もあったことであろうことを考えると、この人体問答書は医学史上貴重な資料といえる。なお、明治7 (1874) 年5月に第一大学区医学校に改称された。これが現東大医学部の前身である。

研究資料

著者らが蔵する小学用の人体問答書のうち

1) 江馬元齡著³⁾：人身問答、後篇、明治8年12月発行

2) 上田文斎著⁴⁾：校正小学人体問答 全 明

* Historical investigations of catechetical books on schoolchild body

** MITSUO YATSU, TOSHIHIRO FUJII, TAMEAKI EGAWA, TOKUO YATSU Nhon University of Dentistry at Matsudo 日本大学松戸歯学部

治 8 年 12 月 発行

3) 堀野良平著⁷⁾: 幼学人体問答 全 明治 9 年 4 月 発行

4) 上田文斎著⁵⁾: 校正増補 小学人体問答 全 明治 9 年 10 月 発行

5) 松川半山編⁶⁾ 上田文斎訂正, 訂正小学人体問答 全 明治 10 年 3 月 発行

を資料とし, 特に凡例と本文の齒科に関する部分について考証を試みた。

研究成績

1. 江馬元齡 著³⁾ 人身問答 後篇 15×22 cm 和綴 69丁 岐阜県師範学校教長 太田謹聞正 明治 8 年 12 月に大垣書林, 岡安慶介より発行。明治 8 年 5 月の坪井芳洲の跋文がある。なお著述者, 岐阜県士族, 江馬元齡, 同県下第五大区, 三小区と記されていて学制を知ることができる。題言に「天地ノ間凡ソ動物体中ニ於テハ人身ヲ最貴シトス。故ニ其造構組織太タ緻密ナリ。常民童蒙ト雖モ之ヲ能ク弁識セサレハ人タル者ノ作用何ヨリナルトイフ理ニ腫シ。此理ニ暗ケレバ摂養ヲ失ヒ…今記載スル所ハ人身諸器ヲ大略順列シテ問答トナシ諳誦セシメントス」とあり, 出版の主旨を知ることができる。そして, その第 1 問は, 凡ソ人体ノ骨骼ハ幾数アルヤ, 答: 諸説異別アリ, 亜ノ「ウイルソン」氏ハ齒牙三十二枚ヲ加ヘテ二百四十六骨ト定メ, 又, 「カットル」氏ハ二百八骨ニ別チ, 又, 「リバック」氏ハ八百七十四骨ト定ム, 蓋シ此等ノ説ハ齒牙ヲ除キテノ説ト見エタリ, 第 2 問: 頭骨ハ数ノ順序ハ如何, 第 3 問: 腦ノ形状及ヒ其作用ハ如何, 第 4 問: 腦ヨリ出ツル所ノ神経ナル者ハ幾対アリヤ, 答: 此神経ハ中古十対ノ名ヲ設ケシカ輓近ニ至テ十二対トセリ, 第一対: 嗅神経, 第二対: 視神経, 第三対: 動眼神経, 第四対: 運車神経, 第五対: 分布神経, 第六対: 牽引神経, 第七対: 顔面神経, 第八対: 聴神経, 第九対: 舌咽神経, 第十対: 迷走神経, 第十一対: 副神経, 第十二対: 舌下神経, 右十二対ノ内純粹ノ知覚運動トヲ主サトル神経ニ區別ス, ○知覚純粹ニ属スル者四ツ, 第一対, 第二対, 第八対, 第九対, ○運動純粹ニ属スル者六ツ, 第三対, 第四対, 第六対, 七第対, 第十一対, 第十二対にわけ, 更

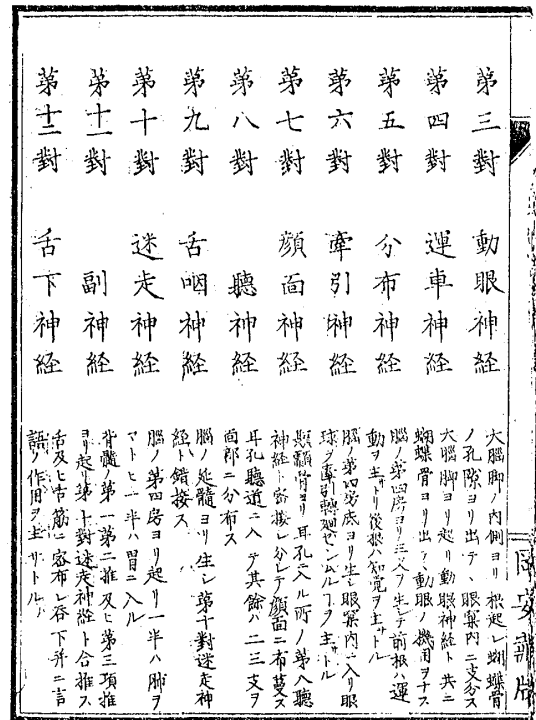


図 1

に神経の組織や自律神経にもふれている。又, 分布神経については, 腦ノ第四房ヨリ三又ヲ生シテ前根ハ運動ヲ主サトリ, 後根ハ知覚ヲ主サトル (図 1) と解説され, 当時の小学生に理解されたのであろうかの疑問がもたれるほど高い内容である。眼, 呼吸器, 血液循環, 消化器, 泌尿生殖器, 皮膚, 筋などの問答について最後に「附録」として, 凡ソ人身ヲ分テ三系トス。覚系, 動系, 養系是ナリ。身体諸部ニ於テ腦背神経系ノ布蔓セサルハナシト雖トモ今此書ニ神経遍布ノ連系ヲ記載スレハ太タ煩冗ニ堪ヘス。且童蒙ノ諸記スルモ不便ナルカ故ニ之ヲ略ス。他日次編ニ詳載セント要スルナリ。人身ニ於テ神経ノ作用ハ第一ノ基礎ナリト雖トモ此神経ヲ欠ク部ナキニアラス。之ヲ略ス左ニ列シテ諳記セシメンカ為メニスとし一, 瓜端, 二, 齒牙, 三, 毛髮など十二種の臓器をあげている。なお, 本書は後篇とあるのでおそらく前篇があり, その中に齒科, 口腔領域があると思われるが未管見のため不明である。又, 本書には図がない。

2. 上田文斎著⁴⁾ 校正小学人体問答 全 15.5×19 cm

和綴 13丁 明治8年12月出版 出版人は前川善兵衛 前川宗七で大阪の式書堂発行である。凡例に此書ハ人体名義ヲシテ小学生徒ニ記憶ナサシメシカ為ニ仮ニ問答ヲ設ケ其大略ヲ編輯スル者ナリ、○ハ問ノ標ナリ、□ ハ答ノ標ナリ、図式ハ木版ヲ用ユルヲ以テ原図銅版ノ如ク繊細精密ヲ尽スコト能ハス唯タ人身形器ノ位置ト動脈循環ノ景況ヲ概察セシムル而已とあり、全体骨骼之図、全体面背之図、動脈循環之図、全体之中部内臓位置之図の4図がしかもカラー刷で冒頭に掲載されている。本文は第一章より第五章にわけて問答式に、しかも漢字には片仮名が付せられ簡易に説明されている。第一章で歯科に関するものは○ 味官（ミクワン）トハ何（ナニ）ノ作用（サヨウ、ハタラキ）ヲ主（ツカサ）ドルヤ、□ ロ舌ナリ、ロ舌ハ飲食ノ五味ヲ味ヒ知ルコトヲ主ドル故ニ味官ト云フ、第二章では ○ 全身ニ於テ九竅（キウケフ、ココノツノアナ）トハ何ノ処ヲサシテ云フヤ、□ 眼二個、耳二個、鼻二個、ロ一個、前陰一個、後陰一個、等ヲ合シテ九竅ト云フナリ、

○ ロノ下部ハ何ト云フヤ、□ 頷（ガン、オトガヒ）ト云フナリ、第三章では ○ 顔面トハ何レヲサシテ云フヤ、□ 頭ノ前面ヲ云フナリ、○ 鼻ノ両傍ヲ何ト云フヤ、□ 腭骨部ト云フナリ、○ 腭骨（アゴホネ）ノ下部ヲ何ト云フヤ □ 頰ト云フナリ、○ ロヲ圍繞スルコロヲ何ト云フヤ、□ 口唇ト云フナリ口唇ノ周囲ニ在ル毛ハ何ト云フヤ、□ 髭（シ、ヒゲ）ト云フナリ、○ 齒ハ何ノ作用ヲ主ドルヤ、□ 齒ハ食物ヲ咀嚼スルコトヲ主トルナリ、○ 齒ノ列（ツラ）ナル肉ハ何ト云フヤ、□ 齒齦（シコン、ハグキ）ト云フナリ、第四章は四肢に関する問答のため歯科はなく、第五章は ○ 人軀ノ中、最要ニ扱フ可キ部分ハ何部ヲサシテ云フヤ、□ 両眼、鼻下（ハナノシタ、ニンチュウ）、結喉、胸部、両脇、臍丸、動脈、等ノ部分ハ常ニ謹慎シテ損傷スルコト勿ル可シ、○ 動脈トハ何レノ所ニ在ルヤ、□ 顳顬（セウジュ、コメカミ）、耳前、両頸、頷下、腋窩、脇下、腕前、手脈、両股、前要、跗前、足脈、右ノ部分ハ動脈外皮ニ搏動シテ最モ大動脈ナリと救急法や診断（脈診）に必要な項目をあげ

ている。定価は9銭である。

3. 上田文斎著：校正増補，小学人体問答全19丁で前掲の校正本より6丁即ち12ページが増加され、明治9年10月に発行、定価13銭である。

校正本は明治8年11月27日、御届、同12月出版で、その凡例の誌は明治8年11月に対し、校正増補本は版權免許、明治9年8月9日、出版発行は明治9年10月であるが、その凡例の誌は校正本と同じ明治8年11月であることから校正本はおそらく版權免許されないままの出版と考えられる。しかし、増補本はその凡例において、漢字にはすべて片仮名を付け、一、此書ハ人軀名義ヲシテ……其大略ヲ輯録スハ校正本と同じであるが、続いて此編ハ主トシテ人軀ノ外形ヲ論ジ尽内部ニ及ト雖トモ唯内臓位置ノ部分ヲ微ノミが付加されている。又、二編ニ於テハ内部骨格ノ構造筋肉及臟腑位置且神経系生理作用ノ義ヲ謁示ス。暗射ニ於テハ予別ニ懸図ヲ製ス、此ニ由、勉強スルトキハ恰モ実地ニ試ルガ如シ、余嚮ニ此著アリト雖モ頗ル世ニ公布シ、梓刻、已ニ磨滅ス、依テ今茲ニ神経生理作用ノ義ヲ補綴（ホセツ）シ再刻ス、実ニ衛生ノ基礎タル書也とあり、校正本の増訂本である

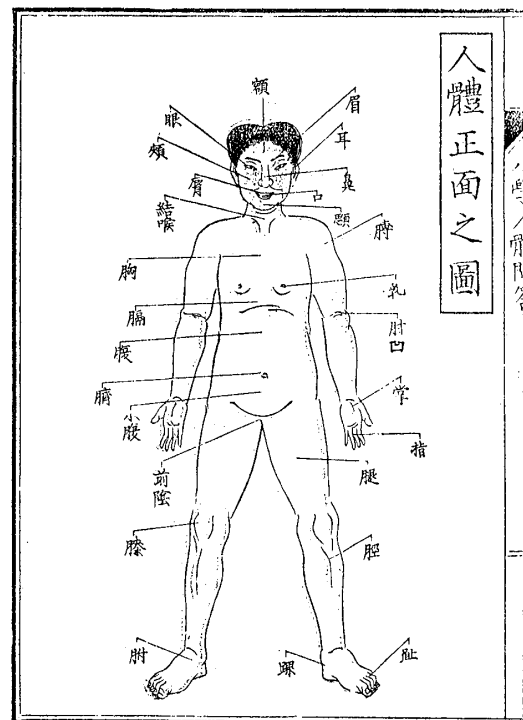


図 2

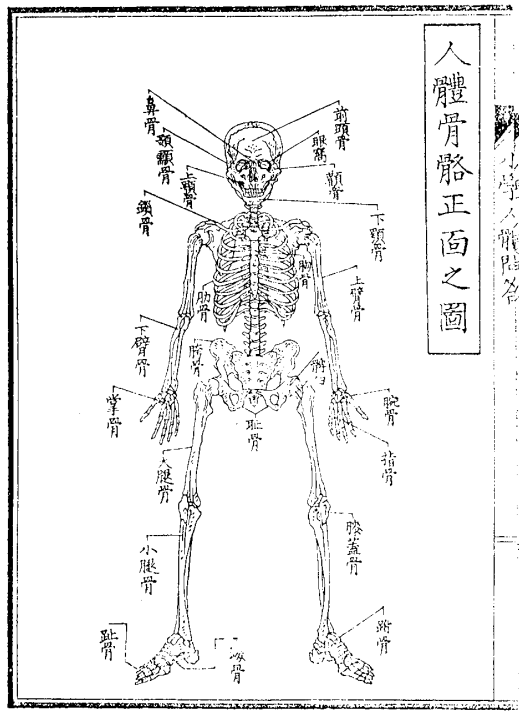


図 3

ことがわかる。

では、いかなる点が増補されたかについてみると次の如くである。

冒頭に掲げた図は人体之胸腹内臓位置之図，人体正面之図（図2），人体背面之図，人体骨骼正面之図（図3），人体骨骼背面之図，動脈循環之図の6図となり，また解説も詳しくなった。

本文は第一章より第六章となり，校正本の第五章に比して一章の増加となる。

第一章において ○ 頭腔トハ何ヲ云フヤ，□ 頭首ナリ，此ヲ前後ノ二部ニ区分シ，前部ヲ顔面ト後部ヲ頭顱ト云ナリ，○ 顔面ノ上部ハ何ト云ヤ，□ 額ト云ナリ，○ 顔面ノ中央ニ隆起スル者ハ何ト云ヤ，□ 鼻ト云，其中央ヲ鼻脊ト云，最モ高キ部分ヲ鼻準ト云，其両側ヲ鼻翅ト云ナリ，○ 鼻ト耳トノ間ニ隆起スル処ハ何ト云ヤ，□ 顴骨部ト云，其下辺氣ヲ含デ脹スル処ヲサシテ頰ト云ナリ，○ 鼻下ニ在ル深竅ハ何ト云ヤ，□ 口洞ト云ナリ，○ 口外ニ環ル縁肉開闔（カイカツ）ヲ為者ハ何ト云ヤ，□ 上下ノ唇ト云ナリ，○ 口内齒ノ列ル肉ハ何ト云ヤ，□ 齒齦ト云ナリ，○ 齒牙（シゲ）ハ何ノ作用ヲ為スヤ，□ 齒牙ハ食物

ヲ咀嚼スルコトヲ主ドルナリ，○ 舌ハ何ノ作用ヲ為ヤ，□ 飲食ノ諸味ヲ弁知シ且ツ嚥下送導ヲ主ルモノナリ，○ 舌ノ後方ハ何ト云ヤ，□ 咽喉ト云，咽ハ後方ニ位シテ食物ヲ嚥下シ喉ハ其前方ニシテ呼吸ヲ通ズル管ナリ，○ 唇ノ両側ハ何ト云ヤ，□ 口吻ト云ナリ，○ 唇ノ上下ニ在毛ハ何ト云ヤ，□ 唇ヨリ上ニ在ヲ髭（シ，ウハヒゲ）ト云，下ニ在ヲ鬚（シュ，シタヒゲ）ト云，○ 唇上ニ於テ縦ニ微凹スル処ヲ何ト云ヤ，□ 水溝ト云，又上部ヲ人中ト云ナリ，○ 唇下微凹スル処ヲ何ト云フヤ，□ 頷又承漿ト云ナリ，○ 承漿ノ下辺ハ何ト云ヤ，□ 頤ト云ナリ，○ 頤ノ両側ハ何ト云ヤ，□ 腮（サイ，アギト）ト云ナリ，第二章では ○ 味官トハ何ノ作用ヲ主ドルヤ □ 舌ナリ，口舌ハ言語ヲ調適シ，飲食諸味ヲ弁知シ且嚥下ヲ補助ス，故ニ此部ニ循布スル神経ヲ舌咽神経ト云，第三章から第五章には歯科に関するものはない。第六章には，校正本では第二章にあった ○ 人体ニ於テ九竅トハ何ノ処ヲ云ヤ，□ 眼目一個，耳竅 二個，鼻孔二個，口洞二個，前陰一個，肛門 一個等ヲ云，此部ハ神経ノ循布殊ニ饒多ナル故最モ貴要ノ部トスとあるが眼目二個，口洞一個の誤りであろう。○ 人体ノ中最要ニ扱ベキ部分ハ何ヲ云ヤは校正本と同じであり，次いで ○ 動脈トハ何ヲ云ヤ，□ 人体中血行ノ大管ニシテ搏動スル部ヲ云，○ 動脈皮膚ニ於テハ何ニ搏動スルヤ，□ 顳顳（セツジウ，耳前，両頸，頷下，腋窩，脇上，腕後，手脉，両股，腰前，腓下，足脉等ナリ惣テ動脈ハ深部ニ位スト雖モ右ノ部分ハ動脈ノ搏外皮ニ顯露スルノ部ナリ図前ニ出ス，○ 両眼ヲ損傷スル時ハ如何ナル害ヲ為ヤ，□ 眼ヲ損傷スルハ喩バ硝子燈ノ破碎スルニ異ナラズ，眼中ノ精液ヲ漏泄スルヤ有名ノ医師ト雖モ之ヲ理復スルコト難シ，○ 鼻下ヲ損傷スル時ハ如何ナル害ヲ為ヤ，□ 凡テ面部ハ神経ノ分布饒多ナル故ニ神経ノ感応鋭敏ニシテ眩暈昏懵（コンボウ）人事不省ノ危険症ヲ呈スルナリ，○ 結喉及び胸脇ヲ損傷スル時ハ如何ナル害ヲ為スヤ，□ 大氣ノ呼吸ヲ漏泄シ肺ノ彙龕（タワヤク）充滿セザル故ニ血液ノ粘稠ヲ鮮活稀渙スル作用ヲ妨害シ終ニ危険ニ陥リ斃ルベシ，○ 動

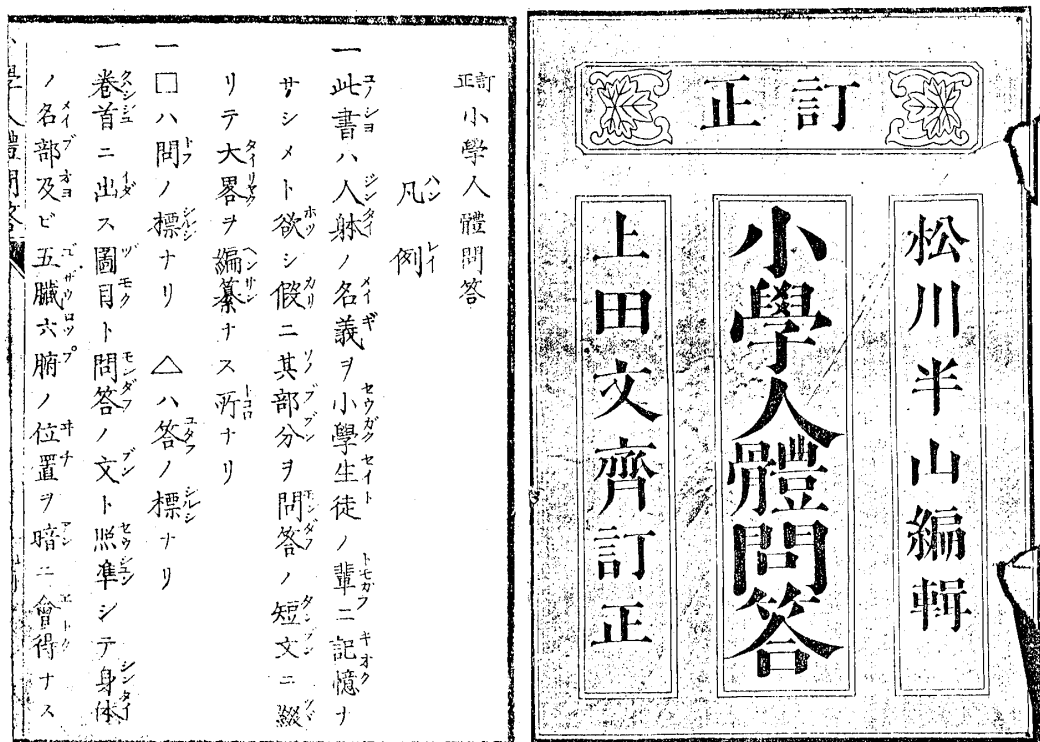


図 4

脈ヲ損傷スル時ハ如何ナル景況ヲ為ヤ、□ 他ノ血ヲ漸次ニ出ト雖モ動脈ノ血ハ第一鮮血ニシテ迸射ノ勢アリ 故ニ直ニ理復ヲ加ヘザレバ虚憊（キョハイ）シ四肢厥冷、呼吸幽微トナリ終リ斃ルナリで終っているが特に増補は第六章の救急法におかれている。なお、後尾にある校正増補小学人体問答の広告には初編一冊、二編一冊とし嚮キニ初編発閱スル処、頗ル世ニ公布シ五月ニ亘ラズシテ梓刻模糊ス、故ニ再刻ヲ先生ニ希望ス時ニ其需ニ応ラレテ神経生理作用ノ義ヲ今茲ニ補綴セラル最モ此書ハ簡易ニシテ幼童ト雖トモ衛生ノ要旨ヲ領解シ易キコト此ニ勝ル者ナシとあることから当時のベストセラーであったことがわかる。

4. 松川半山編輯，上田文齋訂正，訂正小学人体問答 全 12×13 cm 和綴（図4）13丁で明治10年2月7日出版御届，同年3月刻成，編輯人が松川半山，訂正並出版人が上田文齋で前川宗七より発行された。

凡例は、此書ハ人軀ノ名義ヲ小学生徒ノ輩ニ記憶ナサシメト欲シ假ニ其部分ヲ問答ノ短文ニ綴リテ大略ヲ編纂ナス所ナリ、□ハ問ノ標ナリ、△ハ

答ノ標ナリ、卷首ニ出ス図目ト問答ノ文ト照準シテ身体ノ名部及ビ五臟六腑ノ位置ヲ暗ニ會得ナストキハ其生理作用ノ儀ヲ識リ我身ヲ大切ニ自愛ナシ敢テ害ヒ敗ラザレバ即チ孝ノ道ト云フベシ、明治9年8月、松川半山述とある。上田の校正本と比較し、図も4図があり、その掲載順も全く同じであるがカラーが少しく薄く、又、松川本では第2図に局部に褌が着用されている。○が問、□が答に対し松川本は□が問、△が答であり、又、第一章の章を回とし、第一回として○齧官を校正本ではシウクワンと片仮名を付けてあるが松川本ではキウクワンと正しく付けてある。第三回の7丁に □ 舌ハ何ノ作用ヲナス者ナリヤに続いて □ 舌ハ何ノ作用ヲナス者ナリヤ、△ 即チ舌ハ食物ヲ味ヒ言語ヲ助クル者ナリが入っている点に違いを認めるが、校正本をコンパクト化したもののようである。

5. 堀野良平著⁷⁾ 幼学人体問答 全 22×15 cm 和綴 15丁 明治9年4月御届，同4月出版，尾張，慶雲堂蔵板で名古屋，岐阜，四日市，静岡，山梨，京都，大阪，東京など42の書物問屋より売

られていた。

凡例に、問答ヲ設ケ小学生徒ヲシテ記誦シ易カラコトヲ要ス、図式ノ如キハ吾筆写ニ係ル故ニ原図銅板ノ如ク精美ヲ尽スコト能ス、此書自ラ需ムル者ニ非ス、書肆却テ吾ニ需ム其需ムルヤ大ク急ナリ故ニ輯録遂日ニシテ成ル、著シ誤錯アラハ之ヲ訂セ、明治9年、編輯者識とあって著者名でなく編輯者とあるのは本書の内容が、上田著の校正本より僅かに詳しく、増訂本よりは簡易である点おそらくこの両書をもとにして編輯したと考えられる。上田本と比較すると次の如くである。冒頭に掲げた図は全身前面之図、全身背面之図、全身骨格之図、動脈循環之図、内臓配置之図、の5図で校正より1図が多く、増訂本より1図が少なく、しかも第1図と2図はカラー刷でない。これらの書の問1についてみると上田本は、人ハ地球上ニ於テハ如何ナル物躰ナルヤに対し、地球上動物中ノ靈長ニシテ直立歩行スルモノナリ、で校正本、増訂本ともに同じである。松川本は、夫人ハ此地球上ニ於テ如何ナル物躰ナルヤに対し、地球上ニ生ズル動物ノ中ニテ最モ靈長ニシテ直立歩行スル者ナリ、

それが堀野本は、人ハ地上ニ於テ如何ナル物ナルヤに対し、動物中最モ靈長ニシテ知識ヲ具ヘ言語（ゲンギヨ）ニ通シ直立歩行スルモノナリで、上田本より正解の感がする。問2は上田本の、人躰ハ幾部ニ大區別シテ云可キヤ（校正本、増訂本）、其人躰ハ幾部ニ大區別ナシテ云ヘキヤ（松川本）に対し、堀野本は、人体ヲ区分シテ幾部トスルヤで、その答は、分テ三部トス（校正本、堀野本）、分テ即チ三部トナス（松川本）、に対し増訂本は頭及軀幹、四肢ニ區別シテ云ナリとの差異がある。問3は、三部トハ何レヲサシテ云フ可キヤ（校正本、松川本、堀野本）に対し、増訂本は頭及軀幹トハ何ヲ云ヤで、その答は、上部、中部、下部（校正本）、上部、中部、下部ニ區別ス（松川本）、頭胸腹ノ三部ニ区分シテ三腔ト云ナリ（増訂本）、に対し堀野本は上腔、中腔、下腔是ナリと堀野本がより正しくしかも分り易い。又、上田本の作用（ハタラク）を機能（カラクリ）としている。即ち、味官トハ何ノ作用ヲ主ドルヤ（校正

本、松川本、増訂本）に対し味官トハ何ノ機能ヲトルヤ（堀野本）、その答は、口舌ナリ口舌ハ飲食ノ五味ヲ味ヒ知ルコトヲ主ドリ故ニ味官ト云フ（校正本、松川本）、舌ナリ口舌ハ言語ヲ調適シ飲食諸味ヲ弁知シ且嚥下ヲ補助ス故ニ此部ニ循布スル神経ヲ舌咽神経ト云（増訂本）、に対し堀野本は、舌ノ官能ナリ、口舌ハ飲食ノ五味ヲ知覚スルヲ主トル故ニ味官ト云フ、則舌神経是ナリで上田本は直訳、堀野本は意識ともいえる。なお第5章は救急法で校正本、松川本と同じである。

考 証

この「学制」は、これを実施するに当り当時の社会情勢や費用などの点から完全に行うことができなかったのもので、各大学区に3校以上の小学校をおくこととしたが、それでも明治6（1873）年には8000の小学校ができ、その他私立の小学校を含めその数は12,000をかぞえ、更に明治11（1878）年には小学校数26,584校、児童数2,273,223人に達した⁸⁾。明治8年1月8日、文部省は小学生徒の学齢を満6歳から満14歳までと定めたので、男女とも6歳になると小学校に入学することになった。小学校は更に下等（6～9歳）小学校と上等（10～12歳）小学校とにわけられ学年はそれぞれ4年間であった。そして、下等小学校の4年間は国民の義務として誰でも受けなければならないと決められた。

「学制」実施の状況を視察し、指導したのは米国人のダビット、モーレーであったが、この学制は欧米の学校制度をとり入れて急いで作られた計画であったため、発足当初から改善を必要とする点も少なくなかった。そこで当時における社会情勢にも即応させて、明治12年9月29日に「学制」を廃止して「教育令」を公布した。

小学校、中学校、大学校、師範学校、専門学校、其他各種学校として学校体系を確立し教育の目的においても「学制」において「小学校ハ教育ノ初級ニシテ…」とあったものを「教育令」において「小学校ハ普通ノ教育ヲ児童ニ授ケ…」と一層明確にした。この「教育令」は明治13年12月28日に改正公布、更に同14年6月18日に「小学教育心得」を公布しこの中で身体教育の重要性を強調

した。以上の経過からこれらの人体問答書は明治8年から同11年に至る間の出版であることが理解できる。又、学齢からしてしかも義務教育の下等小学即ち6～9歳児の教科書であったことから考えると、江馬元齡著は極めて難解であったのに比べて上田本は簡易であり、更に堀野本は上田本の3書の直訳を意識とし、より一層平易にし、小学人体問答から幼学人体問答としたのであろう。明治19(1886)年には尋常小学校、高等小学校となり、更に明治40(1907)年には尋常小学校は6年間になった。昭和16(1941)年太平洋戦争が始った年から尋常小学校、高等小学校は国民学校と改め、初等科6年、高等科2年の8年間を義務教育とする計画をたてたが戦争が激しくなり実行されなかった。戦後6.3.3制になり小学校6年間、中学校3年間で義務教育になったことは周知のごとくである。

結 語

明治4年7月18日に文部省が設置され、翌5年8月3日文部省は「学制」を布告し、小学校の義務教育がはじまった。その時の教科書のひとつに小学人体問答書があり、明治8年から同11年の間に多くの出版をみた。そのうち江馬元齡著人体問答、上田文斎著校正小学人体問答及び校正増補小学人体問答、松川半山編、上田文斎訂正小学人体問題及び堀野良平著幼学人体問答の5書を検討し次の如き結論をえた。

1. 江馬元齡著、人身問答、後篇は図もなく極めて難解な内容で、下等小学校の学齢が6歳から9歳までであることを考えるとほとんど理解されなかったと思われる。

人身問答に小学を冠していないことと、岐阜県師範学校々長大田謹閑、更に題言にも小学生用と記されていないことなどを考えると師範学校用のものとも考えられる。三叉神経が分布神経と記されている。

2. 上田文斎著は校正本と松川本との内容はほとんど同じであり、これらの増補本は付図6を添え、内容、簡易にして誤りも訂正され、凡例に小学生用と明記され且つ校正本出版後5ヵ月で板木が磨滅したことから増補したとあるので当時のベストセラーと考えられる。

3. 堀野良平著は上田本が直訳に近かったのに比して、これを意識とし更に内容をより平易にして編集したもので、小学人体問答に対し幼学を冠し全国の書店から発売されていた。

文 献

- 1) 中野 操：増補日本医事大年表，思文閣，京都，昭和47年12月。
- 2) 文部省：学校保健百年史，昭和48年7月。
- 3) 江馬元齡：人身問答，後篇 大垣書林，岐阜，明治8年12月。
- 4) 上田文斎：校正小学人体問答，全 戎書堂，大阪，明治8年12月。
- 5) 上田文斎：校正増補，小学人体問答，全，戎書堂，大阪，明治9年10月。
- 6) 松川半山編，上田文斎訂正，訂正小学人体問答，全，前川宗七，大阪，明治10年3月。
- 7) 堀野良平：幼学人体問答，全，慶雲堂 名古屋，明治9年4月。
- 8) 藤井尚久，医学文化年表，日新書院，東京，昭和17年7月。